

連載 “Well-being”ことはじめ

第 91 回 存在を賭けた「Everything」

臨床心理士・公認心理師・カウンセラ

三村 和子

心理臨床家の河合隼雄氏は、子どもや教師、保護者、そして教育現場に関わる人々の“心のケア”を支える仕組み——スクールカウンセラ制度の創設に尽力しました。また、日本人として初めてユング派分析家資格を得たこと、文化庁長官を務めたことでも広く知られています。日本の文化や心のありように深く向き合い、多くの著作を通じてその考えを広く発信しました。

河合氏は、スイスにあるユング研究所（分析家養成機関）において、厳格な教育訓練を経て分析家資格の取得を目指しました。最終段階である口頭試問におけるエピソードについて、臨床心理学の研究者・菱田一仁氏が河合氏の思想とその課題に関する論文の中で詳しく検討しています。

口頭試験において「ユング心理学における自己の象徴とは何か」と問われ、河合氏は「Everything」と答えました。この答えは面接官との論争を呼び、一時は資格の取得が危ぶまれる状況にもなったといえます。結果として、河合氏はユング派分析家資格を得ることができました。このことをきっかけにユング心理学が日本の臨床心理学と心理的支援に導入され、学術的・実践的に多大な貢献を果たしました。

河合氏は資格試験から 30 年後の講演において、その出来事について振り返り、以下のよう

私がこのように答え、それを貫こうとした背景には多くの要因があると思いますが、そのひとつとして日本の仏教において強調される「草木国土悉皆成仏」の考えが背景にあったとすることができます。（中略）

その当時に私自身がこの言葉を自覚的に背後にもって試験官と言い争ったのではないことは、事実です。

「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしっかいじょうぶつ）」とは、草木や国土のような非情の存在にも仏性が宿り、すべてが成仏するという仏教思想です。試験に合格することを優先するなら「曼荼羅とか宝石とかなんとか答えればいいんです。（中略）日本語で『森羅万象』という言葉がフッと思い浮かんだ」と河合氏は自伝で述べています。試験官であったヤコービ氏が「全部か、この机もそうか」と河合氏に問い、それに対して河合氏は「この椅子もそうや」と言って論戦になったそうです。このエピソードは河合氏の日本人の自我の曖

味さ、自己という概念についての理解を表すものとして、今も語り継がれています。

欧米での教育や研究生生活の経験から、河合氏は自覚的に「日本人」という病について意識していたといえます。このことから、欧米流の「自」と「他」を明確に分ける二元論を受け入れることはできませんでした。さらに、こうした対立を包括する一元論にも収まりきらないという葛藤も抱えました。こうした矛盾をそのまま捉えるという「自然（じねん）」を重んじる独自の思想を発展させたと言われています。

河合氏は「人間の心」だけでなく、「場」や「関係性」にも意味が宿ると考えました。発達心理学では、自己同一性（アイデンティティ）の確立は青年期（12 歳から 18 歳頃）の課題とされていますが、日本では独立した自己を確立するというよりも、関係性の中で自己を調整し、場に適應することが求められます。そのため、「自己同一性」という言葉に違和感を覚える人も多いのではないのでしょうか。私自身も、カウンセリングの場では「自分らしく」と表現する方が、より受け入れやすいと感じています。

この背景には、日本の組織文化における自己理解のあり方が関係しています。自立した自己を目指す過程においても、個々人は常に組織の風土や文化に影響を受けており、その中で「自分らしさ」を柔軟に変化させることが求められます。

河合氏が「日本人」という病を意識したことは、実際には日本人の心的構造を欧米流の心理学の枠組みでは捉えきれないことへの問いと理解できます。この日本人の心的構造は、現代の情報行動にも見受けられます。たとえば、日本の若者は、従来の検索エンジンよりも SNS を用いて情報を探す傾向が強いといえます。

ここで注目すべきは、SNS の利用が必ずしも人とつながり、対話を深めることを目的としているわけではない点です。SNS の情報収集に偏った利用は、個人の意見を強く打ち出すよりも、対立を避けて周囲との調和を優先する日本人特有の心的構造とも言えます。

ベルクが提唱した「言葉の露点」の概念（言葉が意味を持ち始める臨界点）によると、日本の心的状態は常に露点の高い状態にあり、言語化する前に空気や場の力によって抑制されると考えられます。こうした「場」に依存する心的構造は、率直な発言や対話の機会を奪う懸念があります。

目標を掲げて共に協力して何かを成し遂げようとする時、「何を目指すのか」という根本的な問いについて、対話を通じて共有し、探求する機会が失われつつあります。このような状況は、個人の自己形成のみならず、組織や社会における共通理解の形成にも影響を及ぼすでしょう。長期的には、人間関係の希薄化と信頼感の低下、複雑な問題への対処困難などを招く可能性があります。

次号では、日本人特有の心的構造の課題を企業のメンタルヘルスマネジメントに適用し

て検討します。

<参考・引用>

菱田一仁, “「Everything」河合隼雄の存在を賭けた問答からみる河合の思想とその課題,”
心理臨床学研究, 日本心理臨床学会, 43-1 号, pp. 5-16, 2025.4.

※雑誌「心理臨床学研究」は大学図書館等で限定的に閲覧可能